

# 琉球大学学術リポジトリ

詠み歌琉歌の基礎的研究 『琉球新報』 『沖縄毎日新聞』 に掲載された大正期の琉歌

メタデータ	言語: 出版者: 前城淳子 公開日: 2009-06-12 キーワード (Ja): 琉歌, 詠み歌, データベース, データベース化, 節組琉歌集 キーワード (En): 作成者: 前城, 淳子, Maeshiro, junko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/10907">http://hdl.handle.net/20.500.12000/10907</a>

大正期の琉歌壇 — 『琉球新報』『沖繩毎日新聞』をもとに—

前城 淳子

はじめに

明治四二年四月一八日、第一回琉歌大会が奥武山公園地内城間氏別荘において開催される。この第一回琉歌大会は兼題の応募歌数三一七首、歌会出席者は百名を超えるという盛りあがりを見せ、『琉球新報』は四月二〇日付の紙面から歌会の詠草を連日掲載している。

この琉歌大会の成功を受け、同じ年の十月には首里日曜会主催による琉歌大会が開催される。その後琉歌大会は奥武山歌会と日曜会との交代で春と秋の年二回開催されていくことになる。『琉球新報』と『沖繩毎日新聞』に掲載された琉歌や関連記事をたどることで、この琉歌大会の大変な盛り上がりを知ることができるが、この大会を支えていたのはいうまでもなく、各地で行われていた琉歌結社の活動である。明治四二年だけを見ても日曜会、奥武山琉歌会、比謝疋友竹亭、二六琉歌会、西林琉歌会、糸満琉歌会、戊申琉歌会など多くの琉歌結社が新聞に作品を発表している。

また、明治四二年は琉歌の新派が新聞に登場した年でもある。『沖繩毎日新聞』は柳月庵の「新琉歌壇」の掲載が七月に始まり、続いて月城の「三十字詩」、詩華の「新しき歌」が掲載される。九月には新派の結社である黄胡蝶社、三十字詩会、四三年七月に尚友会が、十二月には東京琉歌会の詠草が紙面に掲載されている。

伊波月城は明治四二年四月一六日付『沖繩毎日新聞』に掲載された「嶽色潮声」の中で琉歌大会の開催について触れ、「明治四二年は沖繩に於ける文芸復興の第一年と見て差し支へないと思ふ」と書い

ていた。琉歌だけではなくこの時期組踊が盛んに上演されるなど、まさに「沖繩の文芸復興」の年といつてよいかと思うが、新聞への琉歌掲載歌数は明治四二年をピークに減少していくのである。

大正期に入ってもその傾向は続く。日曜会や奥武山歌会、垣花琉歌会など、明治期から引き続き活動している結社も見られるが、大正期になるとまったく登場しない結社も多い。琉歌研究会、八重山琉歌会、三六会など、大正期に入って新たに紙面に登場する結社もあるが、明治四〇年代ほどの盛り上がりはみられない。

大正期の結社の琉歌は『近代沖繩歌集』（高良陸輝編 昭和九年）や『波上琉歌会 明治・大正期の琉歌』上下（那覇市教育委員会 一九八九年）で見ることができる。しかし、そこに採られていない作品もあり、大正期の琉歌壇の全容を知るためには当時の新聞に掲載された琉歌をみていかなければならない。明治期の新聞に掲載された琉歌については『近代琉歌の基礎的研究』（仲程昌徳 前城淳子共編著、一九九九年、勉誠出版）によってまとめられている。ここではその成果を踏まえながら、『琉球新報』『沖繩毎日新聞』の二紙を用いて大正期の琉歌についてみていくことにしたい。

第一章 大正期の新聞に掲載された琉歌のデータベース化について  
『琉球新報』は明治二六年九月一五日創刊、『沖繩毎日新聞』は明治四一年一月一〇日創刊である。しかし、『琉球新報』は明治三一年四月一日付から大正七年五月三一日付まで、『沖繩毎日新聞』は明治四二年二月二八日付から大正三年一月三一日付の紙面がまともに残されている他は、部分的にしか見ることができない。

今回は『琉球新報』の大正元年九月から大正七年一二月まで、『沖繩毎日新聞』の大正元年九月から大正三年一二月までを対象にして、両紙に掲載された琉歌（短歌、仲風、口説、つらねなど）を収集した。その際、①琉歌、②作者名、③結社名、④題・題詠、⑤当座・兼題、⑥点者・選者、⑦判定・評価、⑧歌会の開催日、⑨掲載紙名、⑩掲載年月日、⑪掲載号、⑫掲載面、⑬コラム名、⑭見出し、⑮備考の一五の項目ごとにデータベース化を行った。その結果、『琉球新報』三一七五首、『沖繩毎日新聞』一二四七首の琉歌を収集することができた。

大正元年から大正七年までの年毎の琉歌の掲載数を示したのが〈表1〉である。

〈表1 掲載紙別琉歌数〉

掲載紙	大正元年	二年	三年	四年	五年	六年	七年	合計
琉球新報	268	844	458	349	429	483	344	3175
沖繩毎日新聞	312	618	317	-	-	-	-	1247

『琉球新報』『沖繩毎日新聞』に掲載された琉歌四四二二首はその新聞への掲載のされ方や発表形態によって、①結社単位で掲載されたもの（結社詠）、②琉歌大会で詠まれたもの（琉歌大会詠）、③新聞社側が広告などで作品を募集したもの（募集歌）、④個人又は結社以外のグループで新聞に寄稿したもの（寄稿歌）、⑤その他（記事の中で引用された古歌、「読者倶楽部」「葉書通信」など読者投稿欄

に掲載された琉歌など）の大きく五つに分けることが出来るだろう。分類ごとにその歌数を示すと、『琉球新報』に掲載された琉歌三一七五首のうち①結社詠二〇七二首、②琉歌大会詠四〇三首、③募集歌二一首、④寄稿歌一五六首、⑤その他五二三首、『沖繩毎日新聞』に掲載された琉歌一二四七首のうち、①結社詠七七九首、②琉歌大会詠二〇七首、③募集歌四五首、④寄稿歌九三首、⑤その他一二三首となる。

次章で結社詠、琉歌大会詠、募集歌、寄稿歌の四つをとりあげ、大正期の新聞に掲載された琉歌について概観する。

## 第二章 大正期の新聞に掲載された琉歌について

### 一、結社詠（結社単位で新聞に発表された作品）

結社単位で新聞に発表された琉歌は『琉球新報』で二〇七二首、『沖繩毎日新聞』で七七九首、計二八五一首である。大正期の新聞に登場する琉歌結社には、日曜会、奥武山歌会、垣花琉歌会、燕居会、琉歌研究会、三六会、八重山琉歌会がある。歌会の詠草ではないが「山内盛熹先生を弔う」と題して比謝友竹亭の追悼歌十五首、和歌の結社である同風社が歌会の余興として詠んだ「海松」「千代菊」題の琉歌が新聞に掲載されている。明治期にみられた新派の琉歌結社はまったく見られなくなり、大正期の新聞に登場する結社はすべて歌会で題詠を行う旧派の結社である。

大正元年一〇月二七日付『沖繩毎日新聞』第一三六六号第一面に掲載された日曜会詠歌は次のように掲載されている。

日曜会（十月廿三日当座）

点者 伊江朝眞大人撰

十三夜

仁 吉里眞仁

みちたらぬ月の光り照り渡り十五夜よりまさる後の今宵

義 仲濱政模

あかぬ詠ゆさ御慈悲ある君の美代のなか月の影の美さ

礼 松島朝京

てかやう思わらへ伊佐浜に下りて名に立る後の御月拜ま

智 嵩原安光

杯にうつる月影よ見ちもまこと名に立る後の今宵

秀 松島朝京

雲の飛御衣もちりて跡ないらぬかはて照り清さ後の今宵

秀 知念政置

かたることの葉も酌みかはす酒も月に匂ましゆさ後の今宵

佳 仲濱政模

豊む三五夜の月よりもまさて美かけ照り清さ後の今宵

佳 糸満朝義

名に立る月もこれまでよともてかはて照りみしやら後の今宵

点者 伊江朝眞

庭のしらきくの花にいろそへて十五夜より勝るけふの御月

結社詠はこの日曜会のように、結社名、開催日、点者名、歌題、当座か兼題かの区別が記され、詠歌が掲載されている。歌は点者又は選者によって「仁、義、礼、智、信」や「天、地、人」、「一、二、

三、四、五」といったような順位が付けられている。「具志川朝及君を弔ひて（大正五年三月二〇日付『琉球新報』掲載日曜会）」や「伊江男爵氏還暦の賀に寄真祝といふことを（大正七年二月五日付『琉球新報』八重山琉歌研究会）」のように会員の祝儀不祝儀に際して詠まれたものもあるが、多くは先にあげた日曜会の「三日月」のような伝統的な歌題が詠まれており、明治期に若干見られた「おるずんの若草」「梯梧」「伊集の木の花」など沖縄独自の歌題はみられない。大正期の新聞に登場する琉歌結社のうち、明治期から引き続き登場する結社に日曜会、奥武山歌会、垣花琉歌会、燕居会がある。また、大正期に新たに紙面に登場する結社に琉歌研究会、三六会、八重山琉歌会がある。

大正期の新聞に登場する結社を、掲載年毎に掲載歌数を示したのが（表2 結社別掲載歌数一覧）である。大正期に新聞に登場する結社九つのうち、活動期間が長く、新聞へ発表した琉歌の数も多いのは日曜会である。日曜会は結社詠の約五五％、のべ一五八三首もの琉歌を発表している。日曜会は琉歌大会を主催するなど、沖縄で最も力のある琉歌結社といつてよいだろう。大正期に新たに登場する結社の中では、琉歌研究会と八重山琉歌会の掲載歌数が多い。琉歌研究会は大正元年十二月から大正二年十二月までの約一年新聞に登場するだけであるが、四〇〇首もの琉歌を発表している。

結社単位で発表された琉歌は大正期の新聞に掲載された琉歌の六割以上を占めている。大正期は新派琉歌の作品発表がほとんど無く、この時期の琉歌壇の中心を担っていたのは日曜会などの結社である。大正期の琉歌壇の状況を知るためには結社詠を詳細に見ていく以外にない。

各結社の新聞へ作品を発表した期間、点者・選者、題詠の歌題、結社の構成員については「第三章 結社詠について」で詳しく述べ、ることにする。

結社名	掲載紙	T1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	合計
日曜会	新報	68	201	197	196	252	160	74	1148
	沖毎	55	201	179					435
奥武山歌会	新報	88	12						100
	沖毎	78	12						90
垣花琉歌会	新報		17						17
	沖毎	25	28						53
燕居会	新報	24	51						75
	沖毎	19	59						78
琉歌研究会	新報	12	311						323
	沖毎		77						77
三六会	新報		34	76	9				119
	沖毎		15	13					28
八重山琉歌会	新報						181	94	275
同風社	沖毎		18						18
友竹亭	新報					15			15

〈表2 結社別掲載歌数一覧〉

二、 琉歌大会詠（琉歌大会で詠まれた作品）

明治四二年に始まった琉歌大会は大正期に入っても続けられる。年に二回、春と秋に開催される琉歌大会は、大正期には第八回大会から第十九回大会まで計十二回開催されている。また大正三年一月四日には春秋の琉歌大会とは別に「新年梅」題で琉歌大会が催されている。これら、琉歌大会での作品が『琉球新報』に四〇三首、『沖繩毎日新聞』に二〇七首掲載されている。

琉歌大会は明治四二年奥武山歌会主催によって始められたものである。第二回は首里日曜会主催、第三回は奥武山、第四回は首里というように交替で開催されてきた。しかし、明治四三年八月に奥武山歌会の点者を務めていた護得久朝常が死去すると奥武山歌会は休会に追い込まれ、琉歌大会の主催もこの時から首里日曜会が行うようになる。

大正期に行われた琉歌大会はすべて首里日曜会主催となっており、大正三年四月に行われた第一回琉歌大会は「日曜会第十一回琉歌大会」、大正四年一〇月に行われた第十四回琉歌大会では「日曜会琉歌 兼題第十四回」、大正五年五月に掲載された第十五回琉歌大会では「第十五回日曜会大会」、大正五年一〇月に掲載された第十六回琉歌大会は「日曜会第十六回大会」、大正六年五月に開催された第十七回大会は「日曜会第十七回琉歌大会」、大正六年一〇月開催の第十八回琉歌大会は「第十八回日曜会琉歌大会」、大正七年五月開催の第十九回琉歌大会は「日曜会第十九回大会」というように、琉歌大会の名称に「日曜会」が付され、新聞に掲載されていく。

次に各琉歌大会ごとに、開催日、開催場所、当座題、兼題、点者・

選者、新聞に掲載された歌数等について整理する。

(1) 第八回琉歌大会

第八回琉歌大会は大正元年一月三日午前十時より伊江男爵邸で開催される。点者は伊江朝眞。琉歌の兼題は「晩秋」「寄獣恋」の二題、当座題は「述懐非一」「占恋」の二題詠まれている。新聞には兼題の「晩秋」「寄獣恋」題がそれぞれ一五首、当座題「述懐非一」が一四首、「占恋」題が一五首掲載されている。

(2) 第九回琉歌大会

第九回琉歌大会は大正二年四月二〇日午前十時より、伊江男爵邸で開催される。点者は伊江朝眞。この時の琉歌の兼題は「三国志を読んで」「恋天象」の二題、当座題は「僧」であった。新聞には「三国志を読んで」題が一四首、「恋天象」題が一三首掲載されている。また当座題「僧」は一三首掲載されている。

(3) 第十回琉歌大会

第十回琉歌大会は大正二年十月十二日午前十時から、首里当蔵伊江男爵邸において開催される。点者は伊江朝眞。この時の琉歌の兼題は「月前述懐」「寄橋恋」の二題、当座は「文」である。大正二年九月二〇日付『沖繩毎日新聞』に掲載された記事には「当日は旧の十三夜につき引統観月会を催す筈」と記されており、午前十時から始まり月の出る頃まで歌会が行われていたことが窺われる。また一〇月一三日付『沖繩毎日新聞』に掲載された記事には「参会者二十五名「寄橋恋」総歌数百六十五首「草花帯露」総歌数六十九首にて

左の通り入選したり尚ほ当座題「文」の競詠ありて午後七時頃散会したり」として兼題詠が紹介されている。新聞には琉歌の兼題「寄橋恋」、「月前述懐」、当座「文」がそれぞれ一三首づつ掲載されている。

(4) 第十一回琉歌大会

第十一回琉歌大会は大正三年四月十九日、伊江男爵邸で開催される予定であった。しかし、「皇太后陛下崩御遊ばされたるに付延期六」される。その後大会開催に関する記事がないことや、当座題が新聞に見られないことから、歌会は「延期」ではなく「中止」されたものと思われる。新聞には四月二六日付『沖繩毎日新聞』から三回、『琉球新報』四月二七日付紙面から二回にわたって、点者伊江朝眞の採点による兼題「花便」題が一八首、「鳥」題が一三首掲載されている。

(5) 第十二回琉歌大会

第十二回琉歌大会は大正三年一月八日午前十時より、伊江男爵邸にて開催される。琉歌兼題は「初冬」「隔年恋」の二題、当座は「青島陥落を祝て」が出題されている。点者は伊江朝眞。新聞には兼題「初冬」「隔年恋」がそれぞれ一三首、当座題「青島陥落を祝て」が一二首掲載されている。

(6) 第十三回琉歌大会

第十三回大会についての広告や記事が確認できないため、会の具体的な様子を知ることが出来ない。新聞に掲載された琉歌にも開催

日の記載がなく、いつ開催されたのか不明である。第十三回大会の詠歌が新聞に掲載されるのは大正四年五月一九日付『琉球新報』第五三七九号であり、それより以前の四月下旬から五月上旬に開催されたものと思われる。点者は伊江朝眞。当座、兼題の区別が記されていないのでどちらか判断できないが、「蚕」題で一三首の琉歌が掲載されている。

#### (7) 第十四回琉歌大会

第十四回琉歌大会は大正四年一〇月一七日に開催される。この大会も記事や広告が確認できないため、詳しいことは分からないが、新聞に掲載された琉歌作品によって、兼題が「菊」「恋夢」の二題、当座が「寄稻祝」の一題であったことが分かる。点者は伊江朝眞が務めている。新聞には兼題の「菊」「恋夢」題が一三首づつ、当座題の「寄稻祝」が一四首掲載されている。

#### (8) 第十五回琉歌大会

第十五回琉歌大会の詠歌は大正五年五月四日、五日、六日、八日付の『琉球新報』に掲載されている。いずれも開催日の記載がなく第十五回大会がいつ行われたかは不明である。新聞に掲載された詠歌から、琉歌兼題が「蝸牛」「寄竹恋」の二題、当座が「残春」の一題であったことがわかる。点者は伊江朝眞。新聞には兼題「蝸牛」題が一四首、「寄竹恋」題が一〇首、当座「残春」題が八首掲載されている。広告や記事などが確認できない為、開催日や開催場所については分かっていない。

#### (9) 第十六回琉歌大会

第十六回琉歌大会は大正五年十月八日に開催されている。この琉歌大会も記事や広告などが確認できない為、歌会の詳しい情報が得られない。新聞には「秋興」「秘恋」の二題各一四首、当座題「夢」一一首が掲載されている。点者は伊江朝眞である。

#### (10) 第十七回琉歌大会

第十七回琉歌大会は大正六年五月十三日に開催されている。新聞に掲載された詠歌によって兼題が「煙草」「初恋」の二題、当座が「春田」一題であったことがわかる。点者は伊江朝眞である。兼題の「煙草」「初恋」はそれぞれ一三首、当座の「春田」は八首の琉歌が新聞に掲載されている。

#### (11) 第十八回琉歌大会

第十八回琉歌大会は大正六年十月十四日に開催されている。兼題は「寄河恋」「飛行機」の二題、当座は「独居」の一題である。点者は伊江朝眞が務めている。新聞には兼題「寄河恋」「飛行機」題でそれぞれ一三首、当座「独居」題が一〇首掲載されている。

#### (12) 第十九回琉歌大会

第十九回琉歌大会は大正七年五月二十六日に開催されている。「谷残鶯」題の琉歌が掲載されただけで、他の題詠歌や記事、広告なども確認できない。点者は伊江朝眞が務めている。「谷残鶯」題で一一首の琉歌が新聞に掲載されている。

(13) 琉歌大会

琉歌大会は大正三年一月四日に開催されている。通常琉歌大会は春と秋の年二回の開催であり、これは通常の琉歌大会とは別に開催されたものである。兼題「新年梅」題で、大正三年一月三〇日付『琉球新報』に七首、二月一日付『琉球新報』に七首の作品が掲載されている。点者は伊江朝眞が務めている。

三、募集歌（新聞社が作品募集を行い、掲載された作品）

新聞社が天長節や新年に広告を出して琉歌や和歌、俳句、詩などの作品を募集することがある。大正二年の天長節祝日（『沖繩毎日新聞』）、大正三年新年（『沖繩毎日新聞』『琉球新報』）、大正四年新年（『沖繩毎日新聞』）には前もって祝歌の募集広告が出され、それは以下のようなものである。

大正二年一〇月二三日付『沖繩毎日新聞』第一面掲載

天長節奉祝詩歌募集

一、和歌 一、琉歌

一、漢詩 一、俳句

右天長節の祝意を表する為め

汎く江湖の玉吟を募集す

締切 十月二十七日

沖繩毎日新聞社

大正二年一二月二三日付『沖繩毎日新聞』第二面掲載

新年号詩歌募集

和歌「社頭杉」

琉歌「初春海」

漢詩「題随意」

俳句「新年雑詠」

以上玉詠の惠投を希望す

期日は来る二十八日迄

沖繩毎日新聞社

大正二年一二月二三日付『琉球新報』第二面掲載

和歌琉歌俳句募集

新年号に掲出す可き和歌琉歌俳句を募集す

琉球新報社

大正三年一二月二三日付『沖繩毎日新聞』第二面掲載

新年文芸募集

△和歌 △琉歌 △俳句

△漢詩 △小説 △小品文

△脚本 △伽喃 △川柳

△題随意

締切期日 二十八日限り

寄稿宛名

沖繩毎日新聞社文芸係宛

沖繩毎日新聞社

これら新聞社からの募集に対して、全部で六六首の琉歌が寄せら

れている。

『沖繩毎日新聞』は大正二年一〇月三一日付、十一月二日付の第一面に広告で募集した作品を掲載している。一〇月三一日に掲載された琉歌のうち六首を以下にあげる。

天長節を祝ひ奉りて（琉歌）

正四位伊江朝眞

御代おつきめしやうちけふからの御祝園のまつ風の千世のしら

へ

岸本賀雅

年のよるほとによくと願やへる君が万代のけふの御祝

仲濱政摸

肝の雲霧もはれてけふからや御すて日の御祝するかうれしや

山城宗得

けふの御祝日になひく日のみはた千代八千代さかるかけのうつ

る

具志頭朝香

照るてたのことにあふく嬉しさや御掛ほさひ君かけふのお祝

高安朝常

み代つきゆめしやうち今日やわか君の御すて日の祝のはしめさ

らめ

天皇の誕生日を「おすで日八」と表現し、それを寿ぐのは明治の天長節と同様であるが、大正二年の天長節祝日は、「御代おつきめしやうちけふからの御祝」「御すて日の祝のはしめ」と、大正天皇にな

って初めての天長節祝日を祝う表現が見られる。

大正二年一二月二三日付『沖繩毎日新聞』第二面に掲載された新年号詩歌募集は、和歌「社頭杉」、琉歌「初春海」、漢詩「題随意」、俳句「新年雑咏」と歌題が設定されていて、例年とは異なる趣向となっている。「初春海」の題の募集に応じた作品は大正三年一月一日の紙面の第一面に掲載されている。

七十八翁岸本賀雅

はつ春の海や浪路なたやすくのとかなる美代のしるしさらめ

仲濱政摸

きのふまで波のあらさたるうみのうす霞わたてしつかなたさ

渡慶次朝宣

浪間ぬちやかゆる月にうすかすみかかる海からとはるやたちゆ

る

當銘朝顯

かすかなて見ゆる沖の島々やいつのまに着か春のころも

大宜見朝隆

春の海原やささ波もたたぬ静かなて舟もはるか美さ

屋嘉比政呈

初春になれば海原の波ものとかなる花の咲くか清らさ

「初春海」題の琉歌は一日に掲載された以外に、三日の紙面にも三首掲載されている。「初春海」題の歌は、おだやかな春の海の情景を詠むことで年の初めを寿ぐ歌となっている。

募集広告は見られないものの、天長節や正月の祝の歌が新聞に掲

載されることがある。大正二年一〇月三〇日付『琉球新報』には「奉祝天長節」と題して一六名の琉歌が掲載されている。また大正六年九月二四日付『琉球新報』には「琉球新報二十五周年を祝ひて」と題した一九名の琉歌が掲載されている。これらの琉歌は募集広告が確認できないため、ここでは寄稿歌に分類した。しかし、作品募集の広告は確認できないものの、新聞社側から何らかの働きかけがあったのではないかと思われる。

四、寄稿歌（追悼歌、祝の歌、新派詠など個人単位で新聞に発表された作品）

結社名の記載がなく個人単位で新聞に発表されたものをここでは寄稿歌とした。寄稿歌には天皇や友人の死を悼む追悼歌や、友人の還暦を祝う歌、天長節を祝う歌のほかに、「那覇区展覧会を觀て」や「久茂地菊花品評会を見て」「青島陥落」など時事を詠んだ歌などがある。明治期に見られた新派の琉歌は大正期に入るとほとんど見られなくなり、大正元年九月二〇日付『沖繩毎日新聞』に掲載された「おなじ人」の「詩作（三十字詩）」があるだけである。今回は新派詠としてとり上げることにはせずに寄稿歌に含めた。

寄稿歌に分類した琉歌の歌題をあげると以下のようなになる。

- 「諒闇」 大正元年九月五日付「沖每」一首  
「先帝を悼み奉りて」 大正元年九月八日付「沖每」一首  
「先帝陛下を奉悼し奉りて」 大正元年九月一三日付「沖每」一首  
「詩作（三十字詩）」 大正元年九月二〇日付「沖每」「毎日藻壇」  
一〇首  
「先帝陛下を悼み奉りて」 大正元年九月二一日付「沖每」一首

「乃木大将夫妻の殉死を悼みて」 大正元年九月二六日付「沖每」一首

「諒闇」 大正元年一〇月八日付「沖每」二四首

「那覇区展覧会を觀て」 大正元年一〇月二九日付「沖每」一首

「奥嶋憲主ぬしの訃に接して」 大正元年一〇月一五日付「沖每」七首

「久茂地の菊花品評会を見て二首」 大正元年一〇月二七日付

「沖每」二首

「娼妓どもの帽子をあむを見て」 大正元年一二月二八日付「沖

每」一首

「友竹亭新崎盛相ぬしの訃に接して」 大正二年八月四日付「沖

每」七首

「九年母をよみて」 大正二年八月三一日付「沖每」二首

「中秋觀月」 大正二年九月一五日付「新報」三首

「故東恩納盛贊君を悼みて」 大正二年九月二四日、二六日付

「新報」一〇首

「故東恩納盛贊君を悼て」 大正二年九月二六日付「沖每」一〇首

「そたてし菊のつほみを見て」 大正二年一〇月九日付「沖每」

一首

「奉祝天長節」 大正二年一〇月三一日付「新報」二〇首

「前日の潤雨を」 大正二年一〇月六日付「沖每」一首

「故林世功追悼詩歌」 大正二年一〇月一六日、一九日付「新報」

四首

「故林世功追悼詩文集」 大正二年一〇月二〇日付「沖每」三首

「久茂地の菊合を見て」 大正二年一〇月二一日付「沖每」一首

「故林世功三十三年祭追悼之詩文集」 大正二年一月二五日付

「沖毎」二首

「見菊花品評会」 大正二年一月三〇日付「新報」二首

「品評会の菊を」 大正二年二月二日付「新報」三首

「新年祝」 大正三年一月三日付「沖毎」三首

「某赤毛布の東京観」 大正三年五月九日付「沖毎」一首

「歌三味線の友與儀宅盛身まかりけるに」 大正三年六月二六日付「沖毎」二首

「瀧原時報所載」 大正三年一月四日付「沖毎」八首

「青島陥落」 大正三年一月九日付「沖毎」二首

「比嘉賀徳君かみまかりけるをいたみて」 大正四年一月二八日付「新報」二四首

「奉祝歌」 大正四年一月一〇日付「新報」一首

「新年言志」「若水」「新年橋」 大正五年一月三日付「新報」各一首

「山内盛熹君を追弔て」 大正五年七月二五日付「新報」七首

「愛鳥のあとを追ふて死んだ遊女の記事を読みて」 大正五年七月二八日付「新報」一首

「遠山雪」「新年霞」 大正六年一月一日付「新報」各二首

「琉球新報二十五周年を祝ひて」 大正六年九月二四日付「新報」一九首

「小嶺幸之君を悼みて」 大正六年一月一七日付「新報」二首

「嶋内三郎君」「鈴木邦義君」 大正六年一月二五日付「新報」各一首

「知花朝章君」「護得久朝惟君」 大正六年一月二九日付「新報」各一首

「報」各一首

「新年」 大正七年一月七日付「新報」二首

「男爵伊江朝眞氏の還暦を祝ひて」 大正七年一月二七日付「新報」二〇首

「報」二〇首

大正七年二月一日付「新報」一首

「三月十八日當銘朝頼氏還暦を祝て」 大正七年四月一〇日付「新報」九首

「渡嘉敷通昆氏を悼て」 大正七年四月二一日付「新報」一七首

第三章 結社詠について

大正期に琉歌を発表した結社は、日曜会、奥武山歌会、垣花琉歌会、燕居会、琉歌研究会、三六会、八重山琉歌会、同風社、比謝征友竹亭の九つである。以下、各結社の①新聞に登場する期間、②点者・選者、③歌題、④結社の構成員の四つの項目ごとに見ていく。

一、日曜会

①新聞に登場する期間

日曜会が新聞に琉歌を発表するようになるのは明治三九年六月一日付『琉球新報』からである。明治期には『琉球新報』に二〇七回、『沖繩毎日新聞』で六八回作品を発表し、掲載された歌数はのべ一六五五首にのぼる。大正期に入っても活動は続き、『琉球新報』に一八回九、『沖繩毎日新聞』に四一回掲載され、初出は大正元年一月九日付『琉球新報』、新聞で確認できる最後のものは大正七年四月二九日付『琉球新報』第六四一八号に掲載されたものである。掲載

された琉歌はのべ一五八三首。日曜会は大正期に琉歌を発表した結社の中でも活動期間が最も長く、発表した琉歌も多い。

②点者・選者について

日曜会ではそのほとんどを伊江朝眞が点者を務めている。伊江が一人で点者をつとめているもの以外に、伊江朝眞、兼島景福、渡慶次朝宣の三人、兼島景福、稲福全名、當間朝顕、高安朝常の四人、當間朝顕が一人で点者を務めているものがそれぞれ一回みられる。

③歌題について

日曜会で詠まれた題詠の歌題は全部で一一八題あった。このうち、当座題五三題、兼題が五四題、探題が八題あった。これらを新聞に掲載された順に示すと以下のようなになる。

- 寄秋述懐(兼題)
- 十三夜(当座)
- 従門帰恋(兼題)
- 恋(当座)
- 旅泊千鳥(兼題)
- 新年待友(兼題)
- 竹雪(当座探題)
- 爐火(当座探題)
- 年内早梅(当座探題)
- 雪中鐘(当座探題)
- 初恋(当座探題)
- 被厭恋(当座探題)

- 寄海恋(当座探題)
- 名立恋(当座探題)
- 橋(当座)
- 暮村烟(当座)
- 祈恋(兼題)
- 花売の縁を見て(当座)
- 船中梅雨(兼題)
- 忍涙恋(当座)
- 魚(兼題)
- 衣錦帰郷(当座)
- 枕(当座)
- 坂月(兼題)
- 蜘蛛(兼題)
- 新秋(当座)
- 活動写真(兼題)
- 十四日月(当座)
- 夕霞(兼題)
- 菊(当座)
- 郵便(兼題)
- 不知在所恋(当座)
- 新年梅(兼題)
- 無実名立恋(兼題)
- 海辺興(当座)
- 河水久澄(兼題)
- 田家花(当座)

郭公（兼題）  
寄衣恋（当座）  
不慮逢恋（兼題）  
葉（当座）  
公園燈（兼題）  
隣瞿麦（当座）  
名所灌（当座）  
竹間夏月（兼題）  
山家首秋（当座）  
秋月（当座）  
浮世（兼題）  
中城懷古（兼題）  
歲暮（当座）  
山家如春（兼題）  
欲絶恋（当座）  
片恋（兼題）  
海村（当座）  
望遠鏡（兼題）  
摘若菜（当座）  
春駒（兼題）  
恋書（当座）  
寄鳥恋（兼題）  
春夜（当座）  
寄筆恋（当座）  
精進恋（兼題）

雨後夏の月（兼題）  
月下美人（当座）  
寄灯恋（兼題）  
鐘（当座）  
翁（兼題）  
霰（当座）  
新婚祝  
早梅（当座）  
新年言志（兼題）  
待不来恋（兼題）  
恋（当座）  
笠（当座）  
鶏（兼題）  
具志川朝及君を弔ひて  
新樹（兼題）  
思兩人恋（当座）  
一所恋（兼題）  
松有佳色（当座）  
情（兼題）  
馬（当座）  
早秋（兼題）  
古宅萩（当座）  
雨恋（当座）  
尋恋（兼題）  
晴天鶴

初冬霜（兼題）  
寄山祝（当座題）  
不被知人恋（兼題）  
萍（当座）  
新年宴会（当座）  
待鶯（兼題）  
寄国祝（当座）  
疑偽恋（兼題）  
川春月（当座題）  
杖（兼題）  
臨期變約恋（当座）  
夏魚（兼題）  
約雨口恋（兼題）  
披書恨恋（兼題）  
塵（当座）  
閑居夜雨（兼題）  
風告秋（当座題）  
初聞虫（兼題）  
寄風恋（当座）  
秋唯一日（兼題）  
時雨（当座）  
遠恋（兼題）  
醜婦（当座題）  
新年酒（兼題）  
梅花先春（当座）

霞始聳（兼題）  
寄石恋（当座題）  
苦学（兼題）  
樵夫（当座）  
少女携桜（兼題）  
松間藤（当座題）

#### ④ 結社の構成員

日曜会で琉歌を発表したのは全部で一一六名である。このうち、歌数が最も多いのは日曜会の点者を務めた伊江朝眞である。次いで高安朝常、渡慶次朝宣、稻福全名、名護朝直、大山朝眞などの掲載数が多い。

阿波根朝祥（一八）  
新垣太郎（二）  
新崎盛重（二）  
伊江朝英（一〇）  
伊江朝薫（四八）  
伊江朝章（二）  
伊江朝眞（一一八）  
伊志峯禿山（二）  
伊集治令（八）  
糸滿朝口（二）  
糸滿朝義（一七）  
糸滿朝美（二）  
糸滿朝庸（二八）

稻福全名(六二)  
稻嶺盛治(五)  
上江洲由壽(三)  
上間正才(一)  
上間長暢(二)  
浦添西峯(四)  
浦添朝宣(一三)  
浦添朝長(一一)  
大宜見朝隆(四七)  
大山朝眞(五四)  
岳本岱嶺(八)  
翁長良才(一六)  
親里柿軒(一)  
賀數朝睦(四)  
勝連貞(一〇)  
兼島景福(四〇)  
兼濱朝珂(七)  
川平惠許(八)  
神山朝知(三)  
神山朝奉(二)  
神山處如(八)  
龜山朝奉(三七)  
岸本賀雅(一〇)  
宜野山朝修(七)  
儀間倫(一)

金武正宣(一四)  
金城秀長(一)  
久志安均(九)  
久志安壽(五)  
具志頭朝香(三三)  
具志頭朝重(三)  
具志川朝及(一一)  
久高唯鄰(一)  
湖城惠宏(二)  
東風平安信(一)  
崎濱朝功(三)  
佐久本孟教(三四)  
佐久本孟敷(一)  
城間恒有(三)  
勢理客宗宣(一六)  
高江洲昌壯(二七)  
嵩原安光(一七)  
嵩原松亭(一)  
高安朝常(七六)  
高良睦輝(四)  
高良睦順(二)  
知念□□(一)  
知念政置(三三)  
知念政直(二)  
知念政和(六)

知念績昌(二三)  
知念棚敦(二一)  
當銘朝穎(四〇)  
渡嘉敷通昆(七)  
德永盛根(四)  
渡久山朝是(九)  
渡慶次朝宣(六六)  
仲尾次政均(一)  
仲尾次清孝(一)  
名嘉地憲敷(九)  
仲濱政模(一九)  
長嶺宗恭(四)  
名護朝直(五七)  
鉢嶺清温(一二)  
花城朝忠(一八)  
濱川順達(四)  
比嘉賀恭(二)  
比嘉賀慶(三五)  
比嘉賀德(一六)  
比嘉次郎(五)  
比嘉春株(三三)  
比嘉盛株(三)  
古堅榮秀(一)  
平敷朝道(一)  
眞榮里元璋(四)

眞壁朝可(五)  
牧志朝佐(一)  
眞喜志康治(六)  
眞志喜朝睦(三)  
松島朝京(三七)  
松島朝景(一)  
美里朝珍(一九)  
宮城助政(一)  
森田孟德(二九)  
諸見里朝奇(四)  
屋嘉宗德(一)  
屋嘉比政兄(三四)  
屋嘉部政呈(二)  
安森盛秀(八)  
山川朝棟(六)  
山川朝赴(一一)  
山城宗蔭(三七)  
山城宗得(二四)  
山城宗德(一)  
山城宗輔(一)  
山城正常(一一)  
山城正輔(四)  
山田有度(一四)  
吉里眞仁(一二)  
與那原良儀(一五)

芝圃(六)  
泉缸(一)  
南島(一)  
失名(一)  
作者名記載なし(三)

二、奥武山歌会

①新聞に登場する期間

奥武山歌会は那覇の歌人を中心に明治から活動している歌会である。明治期だけで『琉球新報』に一四九回、『沖繩毎日新聞』に七三回掲載されている。大正期には大正元年一〇月三日付『琉球新報』第四四五三号に掲載されたものが初出で、新聞で確認できる最後は大正二年二月一九日付『琉球新報』第四五八六号に掲載されたものである。大正期には『琉球新報』に一二回、『沖繩毎日新聞』に一回掲載され、のべ一九〇首の琉歌を発表している。

②点者・選者について

奥武山歌会で点者・選者を務めたのは伊江朝眞である。点者・選者名が記載されていない一回をのぞいて、すべて伊江朝眞となっている。

③歌題

奥武山歌会で詠まれた琉歌の歌題は全部で八題である。このうち当座が一題、兼題が六題となっている。また、「古寺」の題は歌合の形式で詠まれたものである。奥武山歌会で詠まれた歌題を、新聞に

掲載された順に示すと以下のようになる。

並枕語恋(兼題)  
独見月(兼題)  
諒闇(兼題)  
牛(兼題)  
寒月映雪(兼題)  
筆(当座)  
古寺  
浦鷺(兼題)

④結社の構成員

奥武山歌会で琉歌を発表したのは全部で五六名。このうち歌数の多いのは伊江朝眞、高安朝常、稻福全名、大山朝眞、渡慶次朝宣、屋嘉比政兄、諸見里朝奇などである。

阿波根朝祥(五)  
伊江朝英(一)  
伊江朝薫(三)  
伊江朝眞(一一)  
糸滿朝庸(二)  
稻福全名(八)  
上江洲由壽(四)  
浦添朝長(二)  
大宜見朝隆(五)  
大濱政通(二)  
大山朝眞(八)

翁長良才(五)  
 勝連貞(一)  
 兼島景福(四)  
 兼濱朝珂(四)  
 川平恵許(四)  
 神山盛蕃(二)  
 金武正宣(三)  
 久志安均(二)  
 久志安壽(二)  
 具志頭朝香(一)  
 具志頭朝重(二)  
 具志川朝及(三)  
 湖城恵宏(五)  
 佐久本孟教(五)  
 高江洲昌壯(一)  
 嵩原安光(二)  
 高安朝常(一〇)  
 高良睦輝(四)  
 知念績昌(二)  
 當銘朝顛(三)  
 渡嘉敷通昆(二)  
 渡慶次朝宣(六)  
 渡名喜良樹(二)  
 仲尾次盛孝(二)  
 仲濱政模(五)

名護朝直(二)  
 野崎眞秀(五)  
 鉢嶺清温(二)  
 花城朝忠(三)  
 濱川順達(二)  
 比嘉賀慶(一)  
 比嘉賀徳(五)  
 比嘉春株(二)  
 松島朝京(二)  
 美里朝珍(二)  
 森田孟徳(二)  
 諸見里朝奇(六)  
 屋嘉比政兄(六)  
 山川朝赴(一)  
 山城宗蔭(四)  
 山城宗得(三)  
 山里永昌(二)  
 山里守祥(二)  
 山田有度(一)  
 吉里眞仁(三)  
 作者名記載なし(二)

三、 垣花琉歌会

①新聞に登場する期間

垣花琉歌会が初めて新聞に登場するのは明治四四年七月一九日

付『琉球新報』からである。明治期だけで『琉球新報』に三二回、『沖繩毎日新聞』に三五回掲載されている。大正期には大正元年九月一九日付『沖繩毎日新聞』第一三二四号に掲載されたものが初出で、新聞で確認できる最後は大正二年三月二一日付『沖繩毎日新聞』第一五〇六号に掲載されたものである。大正期には『琉球新報』に三回、『沖繩毎日新聞』に一二回掲載され、のべ七〇首の琉歌を発表している。

### ②点者・選者について

垣花琉歌会は明治四四年から伊江朝重が点者・選者を務めている。明治四五年四月に掲載された五題当座は上江洲由具が選者・点者を務めているものの、主な点者・選者は伊江朝重であつたと思われる。大正期に発表された琉歌は大正元年は伊江朝重が、大正二年になると上江洲由具が点者・選者を務めている。

### ③歌題

垣花琉歌会で詠まれた琉歌の歌題は全部で一二題である。このうち、当座か兼題であるかが記されているものは四題あり、当座が三題、兼題が一題である。垣花琉歌会で詠まれた歌題を新聞に掲載された順に示すと次のようになる。

六日夜

蓮如君子(当座)

見形厭恋

月前旅泊

松風(当座)

暁月

菊花色々(当座)

新年鶯

馴恋

晴天鶴(兼題)

古寺花

難逢恋

### ④結社の構成員

垣花琉歌会で琉歌を発表したのは全部で一五名。このうち歌数の多いのは勝連貞、花城朝忠、浦添朝長、神山處如、高江洲昌壯などである。

伊集治令(一)

上江洲由具(二)

上江洲由壽(一)

浦添朝長(一〇)

翁長良才(四)

勝連貞(一二)

神山處如(一〇)

崎濱朝功(一)

高江洲昌壯(六)

仲濱政模(一)

花城朝忠(一二)

又吉長方(二)

山里守祥(三)

山田建周(二)

吉里眞仁(三)

四、 燕居会

①新聞に登場する期間

燕居会が初めて新聞に登場するのは明治四五年五月三日付『琉球新報』からである。明治期だけで『琉球新報』に二回、『沖繩毎日新聞』に一回掲載されている。大正期では大正元年九月一〇日付『沖繩毎日新聞』第一三二二号に掲載されたものが初出であり、新聞で確認できる最後は大正二年九月一二日付『琉球新報』第四七八七号に掲載されたものである。大正期には『琉球新報』に一回、『沖繩毎日新聞』に一三回掲載され、のべ一五三首の琉歌を発表している。

②点者・選者について

燕居会で点者・選者を務めているのは諸見里朝奇である。これは明治四五年に掲載された作品も同じで、他の点者・選者は見られない。

③歌題

燕居会が大正期に作品を発表した歌題の数は全部で一四題。一題を除いてすべて兼題になっており、当座題は見られない。燕居会が明治期に発表した二題も兼題詠のみであり、当座会は催されていない。燕居会で詠まれた歌題を新聞に掲載された順に示すと次のようになる。

見恋(兼題)

新樹(兼題)

残暑(兼題)

寄梅祝(兼題)

旅恋(兼題)

水鳥(兼題)

若菜知時(兼題)

松風(兼題)

待花(兼題)

寄糸恋

水鶏(兼題)

寄竹祝(兼題)

述懐(兼題)

納涼(兼題)

④結社の構成員

燕居会で琉歌を発表したのは全部で一五名。燕居会では琉歌を発表する際にすべてペンネームを使用している。漱石、艾叟、狂犬、翠董、珀雲、岩木などが作品数が多い。

岩木(一四)

狂犬(一八)

銀月(八)

山之人(四)

出月(二)

晶夫(一〇)

翠董（一六）  
品夫（一）  
林永（一一）  
浪月（一）  
桜山（一）  
櫻山（五）  
漱石（二八）  
珀雲（一四）  
艾叟（二〇）

五、 琉歌研究会

①新聞に登場する期間

琉歌研究会が初めて新聞に登場するのは大正元年一月二三日付『琉球新報』第四五三二号からである。新聞で確認できる最後は大正二年一月六日付『沖繩毎日新聞』第一七五七号に掲載されたものである。新聞に登場する期間は短いものの、『琉球新報』に三五回、『沖繩毎日新聞』に一〇回掲載され、全部で四〇〇首の琉歌を発表している。

②点者・選者について

琉歌研究会として発表された作品は、すべて比嘉賀徳と仲濱政模の共撰となっている。

③歌題

琉歌研究会では大正元年十二月から大正二年十二月までの一年間に三四題の作品を発表している。このうち、当座題は二題だけで、三一題が兼題である。以下、琉歌研究会で詠まれた歌題を、新聞に掲載された順に示す。

千鳥（兼題）  
車（兼題）  
庭雪（兼題）  
閑居雨（兼題）  
初春（兼題）  
琴（兼題）  
初閨鶯  
思当選美人（当座）  
夕陽映島（兼題）  
蛙（兼題）  
水上落花（兼題）  
隣家（兼題）  
郵便（兼題）  
寄衣恋（兼題）  
新竹（兼題）  
虹（兼題）  
蓮（兼題）  
見恋（兼題）  
納涼（兼題）  
旅行（兼題）  
鳥（兼題）

初秋暁（兼題）

懸命恋（兼題）

盃（兼題）

秋夕雨（兼題）

海村（兼題）

船中眺望（当座）

林間月（兼題）

擣衣（兼題）

杖（兼題）

惜秋（兼題）

浜砂（兼題）

冬月（兼題）

煙草（兼題）

#### ④ 結社の構成員

琉歌研究会で琉歌を発表したのは全部で一四名。このうち掲載された歌数が多いのは川平恵許、上間正才、山口全則、眞榮里元璋、比嘉賀徳、饒平名智寶などである。

上間正才（三八）

翁長武雄（二）

川平恵基（二六）

川平恵許（六二）

喜瀬喜長（二三）

仲里政功（一一）

仲濱政模（二四）

比嘉賀忠（二四）

比嘉賀徳（三四）

古堅榮秀（二九）

眞榮里元璋（三四）

山口全則（三七）

山里景昇（二三）

饒平名智寶（三三）

作者名記載なし（一一）

六、三六会

#### ① 新聞に登場する期間

三六会が新聞に初めて登場するのは大正二年八月一九日付『沖繩毎日新聞』第一六五三号である。また現在確認できる最後のものは大正四年一月一日付『琉球新報』第五五六八号に掲載されたものである。三六会は『琉球新報』に一回、『沖繩毎日新聞』に四回、合計一四七首の琉歌を新聞に発表している。

#### ② 点者・選者について

三六会では當銘朝頼が一人で点者・選者を務めている。二紙あわせて一五回作品を掲載しているが、このうち一三回で當銘朝頼が点者・選者となっている。

#### ③ 歌題

三六会が発表した琉歌の歌題は一五題。このうち当座が三題、兼題が一題となっている。三六会で詠まれた歌題を、新聞に掲載された順に示すと次のようになる。

- 紫陽草(兼題)
- 月前契恋(兼題)
- 憂喜同類(兼題)
- 女郎花
- 菊花待開(当座)
- 思(兼題)
- 新年興(当座)
- 寄杉祝(兼題)
- 陽春布徳(兼題)
- 恋人事(兼題)
- 触物催恋(兼題)
- 松契多春(兼題)
- 春情在花(兼題)
- 仙家(当座)
- 寄日祝(兼題)

#### ④結社の構成員

三六会で琉歌を発表したのは全部で二四名。掲載された歌数が多いのは高江洲昌壯、花城朝忠、勝連貞、稻嶺盛治、神山處如らである。

- 新崎興頼(二)
- 池宮城光裕(四)

- 稻嶺盛治(一一)
- 浦添朝長(五)
- 大宜見朝隆(二)
- 大山朝眞(一)
- 翁長良才(一〇)
- 賀數朝睦(五)
- 勝連貞(一四)
- 神山處如(一一)
- 高江洲昌壯(一六)
- 嵩原安光(三)
- 嵩原松亭(八)
- 當銘朝頼(一三)
- 花城朝忠(一五)
- 眞喜志康治(六)
- 山里守祥(四)
- 頑翁(五)
- 岱山(一)
- 岱嶺(一)
- 淡水(五)
- 朝長(一)
- 作者名記載なし(四)

#### 七、八重山琉歌会

##### ①新聞に登場する期間

八重山琉歌会が新聞に登場するのは大正六年三月二十七日付『琉球

新報』第六〇三三号からである。また、現在確認できる最後は大正七年四月二七日付『琉球新報』第六四一六号に掲載されたものである。この約一年の間に『琉球新報』に四三回、全部で二七五首の琉歌が掲載されている。

②点者・選者について

八重山琉歌会では伊江朝真が点者・選者を務めている。大正六年七月に掲載された六月歌会（兼題二題、当座一題）だけは伊江ではなく日曜会会員互選となっている。

③歌題

八重山琉歌会が発表した琉歌の歌題は全部で四五題で、そのうち当座が二三題、兼題が三二題である。以下、新聞に掲載された順に八重山琉歌会で詠まれた歌題をあげる。

- 花下客来（兼題）
- 琴（兼題）
- 梅初開（兼題）
- 初逢恋（当座）
- 寄島恋（兼題）
- 待恋（兼題）
- 機織（当座）
- 山寺花（兼題）
- 春雨（兼題）
- 牛（兼題）
- 思昔恋（当座）

- 新樹風（兼題）
- 思二人恋（兼題）
- 心（当座）
- 窓前螢（兼題）
- 山家橋（兼題）
- 通書恋（当座）
- 竹間夏月（兼題）
- 祈恋（兼題）
- 車上眺望（当座）
- 残暑（兼題）
- 旅泊夢（兼題）
- 紅葉満山（兼題）
- 瓢（兼題）
- 寄名月恋（当座）
- 月下待友（兼題）
- 頼恋（兼題）
- 寄船祝（当座）
- 朝落葉（兼題）
- 老恋（兼題）
- 風（当座）
- 寒松（兼題）
- 社頭水（兼題）
- 歳暮恋（当座）

伊江朝真氏遺稿の賀に寄真祝と云ふことを

新年言志（兼題）

恋坊学問（兼題）

農（当座）

鶯（兼題）

述口（兼題）

不言恋（当座）

夢中逢恋（兼題）

浦舟（当座）

市（兼題）

若草（兼題）

#### ④ 結社の構成員

八重山琉歌会で琉歌を発表したのは全部で二十七名。このうち山城宗得、山城宗蔭、屋嘉宗徳、屋嘉宗業、勢理客知益などが掲載された歌数が多い。

新垣隆祥（一〇）

池城安信（九）

伊野波清益（六）

伊野波盛益（一）

大濱保嘉（五）

大嶺信秀（一）

祝嶺春安（二）

勢理客知益（二六）

長濱克高（一六）

長濱眞欣（六）

比嘉統亨（一）

東恩納盛珍（二）

譜久山朝鼎（一）

譜久山朝弼（五）

船越牛（一）

船越清福（五）

牧志宗保（六）

眞喜屋實茂（五）

松元維新（八）

屋嘉宗業（三一）

屋嘉宗清（一）

屋嘉宗徳（三五）

山城宗蔭（四二）

山城宗得（四三）

與世山慶昌（一）

饒平名其昌（三）

久英（三）

八、同風社

#### ① 新聞に登場する期間

同風社は明治・大正期を通じて最大の和歌の歌会である。大正二年五月に二回琉歌が発表されているが、大正二年五月六日付『沖繩毎日新聞』第一五五〇号に掲載された琉歌には「左は去月二十七日同風社当座席上に於て余興として酒宴最中十分間に於て即詠せしものなり」とあり、余興として特別に詠まれたものであることがわかる。五月二三日付『沖繩毎日新聞』に掲載されたものも「十分

間即詠」となっていて、同じく和歌の歌会で余興として詠まれたものであろう。

②点者・選者について

同風社では「海松」「千代菊」の二題の琉歌を詠んでいる。「海松」題を賀徳、「千代菊」題を賀慶が点者を務めている。

③歌題

同風社で詠まれた琉歌の歌題は次の二題。いずれも和歌の歌会後に余興として詠まれたものである。

海松（当座）

千代菊（十分間即詠）

④結社の構成員

同風社は明治・大正期を通じて多くの歌人が参加した和歌の結社である。琉歌は歌会の余興として詠まれたものが二回新聞に掲載されている。同風社で琉歌を発表したのは全部で九名である。

兼島景福（二）

岸本賀雅（四）

高良睦輝（二）

當銘朝穎（一）

仲濱政模（三）

比嘉賀慶（一）

比嘉賀徳（二）

美里朝珍（一）

朝香（二）

九、友竹亭

大正期に友竹亭として作品が発表されるのは、大正五年六月一日付『琉球新報』第五七五五号に掲載された「山内盛熹先生を弔う」琉歌一五首だけである。友竹亭は明治四〇年一二月から四四年四月まで六六八首の琉歌を新聞に発表しており、新聞以外に資料がないのではつきりとはしないものの、友竹亭の活動時期は明治四四年頃までであったと思われる。大正期に発表されたものは点者であった山内盛熹の死を悼むもので、通常の歌会のものではない<sup>十一</sup>。友竹亭として掲載された山内盛熹の追悼歌の琉歌を寄せた歌人は以下の八名である。

金城秀長（一）

久志安壽（一）

勢理客宗宣（二）

勢理客宗徳（三）

高良展玉（二）

渡久山朝是（二）

山城正常（三）

山城正輔（一）

一 明治・大正期の新聞の保存状況については当山昌直・下地智子「沖縄島で発刊された戦前の新聞に関する収集ノート」(『史料編集室紀要』第28号 沖縄県文化振興会 沖縄県教育委員会 二〇〇三年)に詳しい。

二 結社の中には『琉球新報』と『沖縄毎日新聞』の両方に同じ作品を発表している結社もあるが、今回はその重複の調査をしていない。二八五一首はのべ歌数である。

三 第八回琉歌大会の開催にあたって、大正元年一〇月一三日付『沖縄毎日新聞』に記事と欄外広告が掲載されている。欄外広告は以下のようなものである。

第八回琉歌大会

一 会日十一月三日 午前十時開題 但例に依り琉歌当座会を催す

一 会場男爵伊江朝眞邸

一 琉歌兼題「晩秋」「寄猷恋」点者伊江朝眞

一 和歌兼題「秋夜勉学」「武士」点者兼嶋景福

但琉歌和歌四題共十月廿七日占切歌数は御随意

一 会費は四題共一首に五錢つつ

一 当座御出席の会費金は三重錢の事 但準備の都合に依り兼題

詠歌共に御送附相成度最印紙は二割増の事

一 但期限経過後到着のもの又は会費金を添へざれば棄却す

四 大正二年三月二一日付『沖縄毎日新聞』欄外広告から、大会の開催日、琉歌兼題、大会の開催場所などがわかる。琉歌大会の記事及び広告には知念真理「短歌結社関連記事・広告一覧」(『沖縄近代短歌の基礎的研究』(勉誠出版 平成十三年)でまとめられている。

五 大正三年三月一二日付『沖縄毎日新聞』掲載の欄外広告、一三日付『琉球新報』の記事によって知ることが出来る。

六 大正三年四月一五日付『沖縄毎日新聞』に「琉歌大会延期」との見出しで記事が掲載されている。

七 大正三年一〇月九日付『沖縄毎日新聞』の欄外広告に一二回琉歌大会の広告が掲載されている。

八 「おすで日」は「お生まれになった日」の意。明治以前の琉歌には見られない語で、明治以後、天長節を祝うようになって作られた語であろう。

九 大正三年一二月二九日、大正四年六月二〇日、六月二一日、六月二七日、大正五年二月二四日、三月一五日、八月二四日、一月一七日、一月九日、一月一四日、大正六年三月一七日、三月一四日、四月一一日、四月一三日、九月一四日、九月二〇日の『琉球新報』に掲載された題詠琉歌は、結社名が記載されていないが、伊江朝眞が点者を務めていること、『波上琉歌集 明治・大正期の琉歌』に掲載されている日曜会の作品と重なることから、日曜会の詠歌とした。

十 大正二年五月六日付『沖縄毎日新聞』第一五五〇号掲載「海松」題で詠まれた琉歌について付された文。同風社は和歌の会であり、琉歌を歌会で詠むことは特別なことであった。

十一 大正二年八月四日付『沖縄毎日新聞』には「友竹亭新崎盛相ぬしの訃に接して」として渡久山朝是、山城正常、金城秀長、勢理客宗宣、久志安均、高良睦順、山城正輔七名の琉歌が掲載されている。七名とも友竹亭で活動していた歌人であるが、新聞への掲載のされ方から結社詠ではなく寄稿歌として扱った。